

第2回 長浜市総合教育会議 議事録

I 日 時 平成27年9月4日（金曜日）13時30分～15時43分

II 場 所 長浜市役所東館3階 特別会議室（長浜市八幡東町632番地）

III 出席者

【構 成 員】 藤井勇治市長、北川貢造教育長、井関真弓教育委員
西橋義仁教育委員、川口 直教育委員、七里源正教育委員
西前智子教育委員

【アドバイザー】 押谷由夫（昭和女子大学大学院教授）

【事 務 局】 藤原総合政策部長、松居総合政策部理事兼総合政策課長
中田総合政策課参事、嶋田教育部長、板山教育委員会事務局理事
北居教育委員会事務局理事兼幼児課長、内藤教育総務課長
飯田教育指導課長、中川すこやか教育推進課長
伊吹教育総務課副参事 ほか担当職員（3名）

【議事進行】 藤原総合政策部長

【傍 聴 者】 なし

【報道機関】 2社

IV 内 容

1 開 会

2 市長あいさつ

（要旨）

- ・教育委員会の皆さま方には、子どもたちの教育の充実・発展、健全育成のために尽力いただいていることに対し、心から感謝申しあげる。
- ・押谷教授におかれては、大変お忙しい中、当会議のアドバイザーをお引き受けいただいた。本市における郷土教育のあり方について、ご指導をよろしく願います。
- ・前回の会議でも申しあげたが、私は市政運営の中で、まちづくりの根底にあるもの、それは「人づくり」つまり「人材育成」であると、常に感じている。
- ・政府は「地方創生」をスローガンに、国をあげて地方の活性化と人口減少対策に乗り出しており、本市でもこの6月に「長浜市人口ビジョン」および「長浜市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、「2060年に人口規模10万人を維持すること」あわせて「人口構造の若返り」を目標とする取り組みを鋭意

進めているところである。

- ・戦略に掲げる取り組みを実行し、ビジョンで描く目標を実現するためには、地域の人々の参加と協力が不可欠であるが、その基礎として、人々の地域への理解と愛着、帰属意識を高めることが重要であると再認識するところである。
- ・「地域を愛する心」「自分が住む郷土に誇りを持つ気持ち」など、地域アイデンティティの醸成を図り、「郷土愛」を持った人材をいかに育むことができるかが、今の地方都市に求められており、今後のまちづくりを進めるにあたり、大きな鍵になると思う。
- ・今回の会議では、本市のご出身で、日本の道德教育の第一人者であり、文部科学省の有識者会議の副座長も務められている、昭和女子大学の押谷教授をアドバイザーにお迎えし、「郷土教育のあり方」について、皆さんと一緒に考えたいと思う。

3 アドバイザー紹介

事務局は、配布資料に基づき、本日のアドバイザーである押谷由夫氏について紹介した。

4 議 事

(1) 第2期長浜市教育振興基本計画(案)について

事務局は、配布資料に基づき、第2期長浜市教育振興基本計画(案)について説明した。その後、各構成員から出された意見等は次のとおり。

〈意見：教育委員〉

この計画で掲げる目標を達成し、十分な成果をあげるためには、教育の最前線である学校現場で奮闘されている教職員の方々の理解と協力が不可欠であると考えられるが、そうした場合、教職員の育成や配慮といった視点がやや手薄であると感じる。当計画(案)では、教職員研修の充実に関する記述のみであるが、他方、昨年3月に策定された第2期滋賀県教育振興基本計画においては、「教育力を高める」項目の中で、教員の実践力の向上、組織・チームの教育力の向上、教職員の健康管理等について明記されている。また、国の第2期教育振興基本計画でも、基本施策の中で、教員の資質能力の総合的な向上等について記されている。このことから、当計画においても、教職員に関する記述をより充実すべきと考えらるがどうか。

〈事務局〉

市立小学校及び中学校の教職員は県費負担教職員であることから、市としてどの程度まで踏まえることができるのか、検討する。

〈意見：教育委員〉

計画策定の趣旨として、「社会情勢の変化により生じた新たな課題等への対応」が示されている。この新たな課題とは、取りも直さず「いじめ問題」が挙げられると思うが、当計画ではどのように取り扱われているのか。

〈事務局〉

基本目標 2「子どもの自立に向けて「生きる力」を育む教育を推進します」の中の基本的方向 2「豊かな心の育成」において、いじめ防止対策の総合的な推進に関する記述をしている。

〈意見：教育委員〉

基本目標 3「学校・家庭・地域のつながりを深め、地域全体の教育力の向上をめざします」の中で、情報モラル教育の推進に関する記述があり、スマートフォンやインターネットといったキーワードが示されているが、さらに一步踏み込み、いじめの温床となる「SNS」に関する記述を追加してはどうか。

〈事務局〉

検討する。

〈意見：教育委員〉

東日本大震災はじめ、火災や地震、風水害など、いつ起こるかわからない災害に普段から備えることは大切であり、防災訓練や避難訓練などの防災教育に関する記述が必要だと思うが、当計画ではどのように取り扱われているのか。

〈事務局〉

教育目標 2「子どもの自立に向けて「生きる力」を育む教育を推進します」の中に、地域に根ざした特色ある学習活動・体験活動の推進に関する記述があり、地域に即した防災教育の推進について記載している。

〈意見：教育委員〉

幅広い分野について、適切にまとめられており、考え方の方向性も完璧であると思う。特に、基本目標 2 で掲げる「生きる力」を育むことこそ大切であり、それには、乳幼児の頃から遊びを意識した教育に取り組むことが効果的だと思う。伝統ある長浜の地で、地域に根ざした教育を実践できればと思う。

〈意見：教育委員〉

本市においても、社会的に独り立ちしていない若年女性が妊娠されるケースが少なからずあり、そのような場合、全てではないものの、社会の厳しい現実の壁にぶつかるケースが多いように感じている。妊娠や出産は人生を左右する非常に大きな出来事であり、しっかりとした性教育を行うことが必要だと思う。このことから、性教育を当計画にしっかり位置づけるとともに、学校現場においても外

部から専門家を招き入れるなど、充実したものとして取り組むべきだと思う。

〈事務局〉

学校により若干のバラツキはあるものの、助産師等に学校に来てもらい、性教育の授業を行う取組も進めている。委員ご指摘のとおり、性の若年化が進んでいることから、小学生の段階から取り組む必要性を認識している。

〈意見：教育委員〉

外国人の子ども達の学校生活について考えると、日本語能力の向上が大きな鍵を握っていると思う。学校現場の声をしっかり聴き取った上で、更なる支援の充実に取り組まれることをお願いしたい。

〈事務局〉

更なる支援の充実が必要であることは認識しており、次年度以降に対応できるよう、関係部局と検討しているところである。なお、この機会に、この春から市内の中学校で教鞭をとる教師について紹介したいと思う。この教師は、ブラジル生まれの外国人市民であり、市内の小学校、中学校、高校を卒業後、県内の大学に進学して教職課程を履修し、本年4月から念願の教師生活を送っている。このようなことは一例に過ぎないが、外国人の子ども達が健やかに成長し、日本の地で幸せに暮らすことができるよう、今後ともしっかり支援したいと思う。

(2) 郷土教育のあり方について

事務局から、「郷土教育のあり方」をテーマ設定した理由及び趣旨について説明した後、押谷アドバイザーは配布資料に基づき、基調講演を行った。その後、構成員から出された意見や感想は次のとおり。

〈意見・感想：教育委員〉

具体例を交えた講演であり、大変わかりやすく、また勉強になった。特に、学校と家庭、地域との連携を図る上で、学校を拠点とした通学合宿を実施する取組は、イギリスのボーディングスクールに似ており、とても面白いと感じた。また、グローバル社会で生きていくためには、英会話ができることが必須であるが、たとえ英語が話せたとしても、自分の生まれ育った故郷のことを英語で説明できなければ、それは非常に寂しいことだと思う。「鶏が先か、卵が先か」の議論もあると思うが、まずは自分の住むまちの事を良く知ることが必要だと感じた。

〈意見・感想：教育長〉

知・徳・体は並列でなく、「『徳（いかに生きるか）』を中核に据え、知と体を調和的に発展させる」ことの重要性について教えていただいた。このことを聞き、長浜市が目指す教育の方向性は間違っていないことを改めて確信できた。本市では、これまでから森信三先生の「躰の三原則」を実践しており、さらに昨年には、

「長浜子どものちかい・子育て憲章」を策定し、市民ぐるみの子育て、子育て環境づくりを推進している。押谷アドバイザーの講演の中で、学校を社会教育施設に位置づけてはどうか、という提案があったが、そのような考え方はこれまではあまりしなかったことから、改めて学校の存在意義を見つめ直し、発想の転換を図るよい機会となった。なお、本市では全小・中学校で学校運営協議会が組織されているが、今日までの活動状況を見ると、より地域に開かれた学校をつくることへの可能性は十分にあると感じることができた。本日の押谷アドバイザーの話を踏まえ、今後とも郷土学習を核に据えた学校運営を進めていきたいと思う。

〈意見・感想：市長〉

東日本大震災発生後に毎日新聞のコラムで掲載されていた実話を紹介したいと思う。

〈話の概略〉

東日本大震災取材したベトナム人記者が、避難所で一人の少年にインタビューした。少年は津波で両親を亡くし、激しい寒さと飢えで震えていた。記者は見かねて、少年に自分のジャンパーを着せかけた。その時、ポケットから1本のバナナがポロっとこぼれ落ちた。記者が「バナナ、欲しいか」と問うと、少年はうなずいたので手渡した。ところが、少年はそれを食べるのではなく、避難所の片隅に設けられた共有の食料置き場に持って行き、もとの場所に戻ってきたという。

そして、この記者は帰国後、この少年のことを記事にすると、大きな反響を呼び、ベトナムからの義援金100万ドル（約8000万円）のうち、「バナナの少年にあげてください」という条件つきが5万ドルあったそうである。

この話を聞き、少年の背景にある環境を自分なりに考えてみると、まず、少年を立派に育ててこられたご両親がおられ、兄弟、祖父母などの家族の存在があった。そして、通っていた学校があり、そこには素晴らしい友達や先生がおられた。そして、全てを温かく取り巻く地域社会があったのだと思う。

したがって、本市においても、このような徳を持つ子どもを一人でも多く育てるため、家庭・学校・地域がスクラムを組む、継続してしっかり取り組む必要があると改めて感じたところである。

〈意見・感想：教育委員〉

毎年、浅井の湯田学区、七尾学区では通学合宿が行われており、とりわけ湯田学区においては、学区内の小・中学生を対象に、入浴は近所の一般家庭で「もらい湯」をするなど、地域ぐるみの素晴らしいと取組をされている。また、40数年前の話であるが、旧浅井町においては、町内全域を対象に、子ども達が自分の学区以外の一般家庭でホームステイする事業も実施されていた。40数年前と今とで

は時代が違えばそれまでであるが、いつの時代であっても、「地域の子も達は、地域で育てる」という基本的な考え方のもと、地域ぐるみの取組を継続していくことが大切だと思う。

〈アドバイス：押谷アドバイザー〉

こういう時代だからこそ、学校を拠点とした通学合宿や学区内ホームステイのような、地域が一丸となる取組が求められているのだと思う。そして、それら取組を継続していくためには、資金援助も含めた行政のサポートが必要だと思う。

〈意見・感想：教育委員〉

平成12年、旧木之本町における郷土学習として「子ども達が地域を知り、地域の文化を発掘し、地域の良さを学ぶ」というコンセプトのもと、「木之本見聞探事業」が開始され、地域の商工会をはじめ、地域の様々な団体や機関、有志などの積極的な支援のもと、子ども達の豊かな心を育てる幅広い教育活動が展開された。事業の取組の一つとしては、己高庵の近くに大きな窯を作り、その窯で茶碗を焼き、その茶碗を使って茶道を体験して和敬清寂の心を学ぶという取組であった。その後、平成14年、15年には文部科学省から道徳教育推進事業の指定を受け、押谷アドバイザーの指導のもと、「体験的な活動」の一つとして、茶道体験を導入し、木之本地域の全校園で事業を進める研究を推進することができた。この道徳の体験活動は、少しずつ形を変えながらも、10年以上たった今でも継続して取り組まれている。これもひとえに、押谷アドバイザーの指導のお陰と感謝している。

5 その他

第3回会議は、11月もしくは12月初旬を予定。

6 閉会

教育長あいさつ

(要旨)

- ・ 押谷教授におかれては、大変お忙しい中、わざわざ東京からお越しいただき、郷土の子ども達の健全な育成のために、素晴らしいお話をいただき、ありがとうございました。
- ・ 郷土教育を幹とした道徳教育のあり方について、学ぶことは多岐にわたり、今後の教育の取組や方針を定める中で、十分に参考にさせていただきたい。
- ・ 今後とも、道徳教育はじめ、本市教育に対し、ご指導、ご協力いただけるようお願いする。

15時43分 閉会